

# かたりべ112

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

夏の收藏資料展「戦争を考える夏2014」開催中！  
8月31日(日)まで ★展示見どころ解説 7月26日、8月23日 午後2時〜40分間



①市電通りから大塚駅南口方面を望む。右側の銀行の手前には市電車庫があった。



②コンクリート造の建物はプールのシャワー室。手前に訓練の様子を見る子供が写る。

郷土資料館では、一九八四（昭和五九）年の開館以来、戦争体験を掘り起し、語り継ぐため、戦時中の区民生活や空襲、集団学童疎開などの展示会を行ってきました。一連の展示や講座を通して、多くの方から貴重な資料や情報をお寄せいただいています。

今回の展示では、区の約七割が焼失した一九四五年四月二三日の城北大空襲を中心とした戦災資料のほか、戦時中の町会や学校、防空演習、建物疎開に関する資料や写真、中国に出征した兵士が家族に宛てた手紙や戦地で受け取った慰問袋など、新たに寄贈いただいた資料を紹介しています。

右の写真（上野誠氏寄贈）は、西巢鴨三丁目上で上野 錠剂製造所を経営し、町会長を務めた上野 篁氏が撮影した防空演習の様子です。一九三七年の防空法施行後、空襲に備えた防空演習が本格化し、防火用具の設置や消火訓練などが徹底して行わ

れました。①は一九三九、四〇年頃の防空演習の写真です。右側に安田貯蓄銀行大塚支店（現りそな銀行）が見えることから、大塚市電通り（現南大塚通り）での大規模な訓練だったことがわかります。②は一九四〇年七月二五日、西巢鴨第一尋常小学校（現西巢鴨小学校）西側の裏通りで行われた消火訓練のコマです。プールの水を汲んでバケツリレーを行っていますが、人々の表情に緊張感は見られません。米軍による東京初空襲は、約二年後の一九四二年四月でした。

この他に町会の神輿を供出した記念写真など四〇数点の写真は、戦時下の街の様子や区民の暮らしを伝える貴重な記録です。一九四五年三月一〇日の東京大空襲直後に実施した建物疎開の資料も大きな発見でした。引き続き関連資料の収集に努め、戦争の記憶と記録を次世代に伝えていくことが地域博物館の役割だと考えています。

（郷土 横山）

# 博物館資料の再生 —携帯用の提灯—

## ■提灯職人さんの力を借りる

冬になると遠くに見える富士山。その富士山へは多くの人が登拝し、足跡を遺してきました。そのことは、これまでの『かたりべ』で紹介してきたとおりです。

さて、当館には池袋の富士講の方が使った提灯を収蔵しています。それは、一九八四（昭和五九）年、使用者のご子孫から寄贈されたもので、戦前まで使っていたものということでした①。寄贈後は展示をし、また、資料整理のときに状態を確認していましたが、収蔵後、三〇年が経っていました。

富士講という地域の歴史を伝える貴重なこの提灯を、新しい博物館で展示しようと考えたとき、困ったことが生じました。提灯の和紙の部分が伸びません。和紙には薄く荳油（植物の荳胡麻の種子から採った油）が塗られています。長年閉じたままだったために上下に開かなくなっていました。そこで、瀧澤光雄さん（東池袋在）にみていただきました。同氏は、瀧澤提灯店の三代目です。提灯を資料として展示室で展示するという意図をくんでいただき、資料の歴史性を大切に

にする方法で修復していただくようお願いし、受けていただきました。

## ■ふさわしい材料を選ぶ

瀧澤さんによれば、この提灯は、明治後期に作られ、大正期には次第に作られなくなったものではないかということでした。文字が書かれてある部分と竹ヒゴの部分とを新しくし、その他のところは少し手直しをするということにしました。細く割いた竹ヒゴを丸め、適当な大きさの輪にし、重なった部分を和紙でくるみます②。そして、次の工程のために多少の緩みをもたせておきます。

提灯は、まず、その提灯に見合う型を作らないとできません③。次に、型の回りに竹ヒゴと和紙を貼り、貼り終えると型を抜き取り④、和紙とヒゴを蛇腹のようにし⑤、上下の木脇をつけます⑥。竹は、寒冷地で生育したものがよいということから、新潟県の佐渡島産のものを選びました。

上下の木枠はヒノキの柎目（幹の中心を通して縦断した板面）で作られており、状態がよくそのままを生かしました。木枠は、鉄製の金具で押さえられています

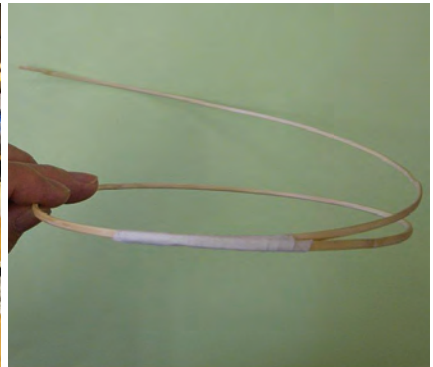
が留め具のなかに欠けたものがありました。本来、留め具は鍛冶屋さんの仕事で、かけている部分の留め具をどうするか、それには苦慮しました。現在、比較的薄い鉄板を加工する鍛冶屋さんがないため、同じものを作ることはできないと判断され、類似した銅製のもので補強するにとどめました⑦。

和紙に油は塗りませんでした。本来、油を塗るのは、耐水性を高めるものですが、展示室であるということと、照明の加減と保管のことを考慮し、塗らないほうがよいという判断をしました。

ここでは紹介しきれないことがたくさんありますが、かつて、人々が、修理しながら使ってきたものを、今回、職人さんの技と心意気でよみがえらせることができました。では、いずれ展示室でご覧いただきたいと思えます。（郷土 福岡）



①修復を待つ提灯



②ヒゴを和紙でくるむ



③提灯の型は木製



④和紙を巻き終え、型はずす



⑤輪にした何十本もの竹ヒゴを縮める



⑥提灯の上下に古い木枠をつけて完成



⑦再生した提灯



# セピア色の記憶

## 第31回 還暦を迎えた丸ノ内線と新大塚駅前の変貌

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九五四年と現在（二〇一四年五月撮影）の東京メトロ丸ノ内線新大塚駅前（文京区の大塚四丁目交差点付近）の様子です。地図に示した\*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。



①



②



新大塚駅は丸ノ内線の池袋―御茶ノ水間が区間開通した一九五四年一月二〇日に開業しました（池袋―荻窪間が全線開通するのは一九六二年）。丸ノ内線は、東京では一九三九年全線開通（浅草―洪

谷間）した銀座線に次いで二番目、全国では四番目に開通した地下鉄です。公益財団法人メトロ文化財団によるサイト「メトロアーカイブアルバム」では、「日本の中央官庁をはじめ、政治、商業、交通の要となる駅を結ぶ丸ノ内線は、戦後初の地下鉄として、デザイン性の高い、真っ赤なボディ（開業時）をもって登場し、その後の日本の発展を象徴するかのようでした。（中略）丸ノ内線は、日本の戦後復興とともに歩んだ歴史ある地下鉄なのです。」と記されています。

さて、開業当初の新大塚駅前周辺は、写真①に見るようになまだ高い建物は確認できず、春日通りと南大塚通りとの交差点には信号機さえありません。撮影の時間帯はよくわかりませんが、人影もまばらです。また、写真左端オート三輪の向こう側に写る鉄筋コンクリート造三階建ての建物は、かつての都立大塚病院です。現在と比較して駅前周辺の変貌ぶりは目を見張るものがあります。ただし、池袋駅方面乗り場への入口地点は現在と同じであることがわかります。

とここで、冒頭で取り上げた丸ノ内線や銀座線は、東京メトロのなかでも開通した時期が早いにもかかわらず、他の私鉄との相互乗り入れを行っていません。それはなぜかわかりますか？

答えは…意外や意外？ 軌間（線路幅）が違うからです。つまり、丸ノ内線と銀座線の軌間は一四三ミリの標準軌であるのに対して、多くの私鉄の軌間は一〇六七ミリの狭軌なのです。ということは…？

現在東武東上線や西武池袋線などに乗り入れている地下鉄の軌間は、当然一〇六七ミリの狭軌です。なお、山手線をはじめとするJR在来線全線は同じく一〇六七ミリの狭軌、一方、新幹線は一四三五ミリの標準軌です。

写真①右手に確認できる路面電車は、錦糸町駅前と大塚駅前間を結ぶ都電一六系統で、この車両のやや右奥に「大塚辻町」の停留所がありました。都電交通全盛期のこの時期、東京中心部の幹線道路には縦横に都電用の線路が敷かれ、都電は都民の足として親しまれ

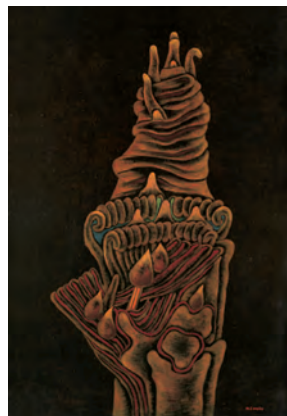
ていたのです。以上、本筋からは外れるちょっとしたウンチクでした。（郷土 秋山）



丸ノ内線と言えば「真っ赤なボディ」を思い出す方も多いのでは…？  
(1959年新宿三丁目での丸ノ内線全通式にて)  
(公益財団法人メトロ文化財団提供)

# 作品を見つめる

## 1 寺田政明



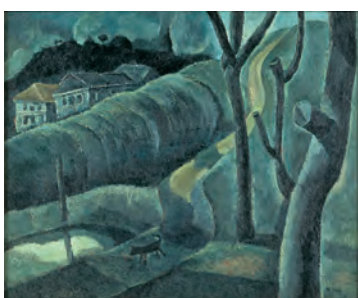
①

これは何に見えますか。あるいは第一印象はどのようなものですか。

唐突な質問ですが、美術作品を見るときに誰でもまず、これはなんだろう、という疑問を感じることに第一印象を持つことは、ほとんど同時に起こっているのではないのでしょうか。よきによきしている、茶色っぽいかたまりがなんだかかわからない、背景がとても暗く描かれている、一部はきのこのようだ。でも、なんだろう。

こうした時に大きな情報量を持っているのが作品の名前です。この作品の名前は《発芽A》といいます。これを知ってから改めて作品を見ると、何かが芽を出しているところなのだろうという前提ができたために、植物の芽の一部なのか、あるいは実際には存在しない植物を想像

して描いたのか、というように、作品の鑑賞・理解に道筋がついていきます。また、AがあるならばBもあるのだろうかと考えた方もあるかもしれません。



②

では、もう一枚の作品はいかでしょうか。こちらは風景が描かれているようです。そして

犬らしき動物がいます。犬の背景には坂道が続く、画面の右側に樹木があつて、左側には大きな建物が、その後方には山が見え、空がつながっています。《発芽A》に比べると、比較的わかりやすいかもしれません。けれど、これはなんだろう、という疑問と、第一印象を持つという点では、変わりがないでしょう。

この二枚は、ともに寺田政明（一九二二—一九八九）によってカンヴァスに油絵具で描かれた作品です。寺田は福岡県八幡市（現・北九州市）に生まれ、一六歳で上京しました。太平洋美術学校で吉

井田忠、松本竣介、麻生三郎らと行動をともし、豊島区長崎、千早、要町などに暮らしました。アトリエ付貸家が建ち並ぶアトリエ村で暮らした池袋モンパルナスの作家、ということになります。池袋モンパルナスの芸術家たちの交流や、作品の持つエネルギーについては、昨今

展示会などで取り上げられることも多いのでご存知の方もおりかと思えます。《発芽A》は、《発芽B》とともに美術文化協会展という展示会に出品された作品です。美術文化協会は、独立美術協会を脱退した福沢一郎の強い影響力のもと、一九三九（昭和一四）年に結成された若い画家たちによる集団でした。創立の辞

では、前衛的意欲を持つ美術団体として一つの方向を持つことが挙げられています。しかし、日中戦争が勃発して二年目のこの時期は、前衛であるだけで当局から目を付けられました。共産主義と関連する活動と受け止められたからです。実は《発芽A》が出品された第二回展は、その直前に福沢が検挙されたときでもあったのです。そのような状況を知ってから見ると、また作品の見え方が変わるでしょう。

一方、《犬のいる風景》は一九五三年の第五回読売アンデパンダン展への出品

作です。戦後、審査なしで誰でもが出品することができたアンデパンダン展に、寺田は初回から九回まで出品を続けていました。豊島区から板橋区前野町に転居後の制作で、坂を登った向こうには赤羽の地が広がっていたそうです。

この二点は、寺田が二八歳と四一歳の時の制作で、その間には一三年の開きがあります。前者は前衛的、後者は穏健、と捉えられるかもしれませんが、しかし双方ともに、寺田のその時期の表現傾向を伝えてくれる作品です。また、表現は変わっても、これらからは、動物・植物を含めた生きるものに注がれた寺田の視線を読み取ることもできます。

\* \* \*

豊島区では、（仮称）芸術文化資料館の準備をすすめ、美術作品を収蔵してきました。これまでも数回展覧会を開催してきましたが、今回から『かたりべ』で収蔵作品等の紹介をさせていただきます。作品の描かれた背景を知ることに加えて、画面から読み取れること、比較してわかる面白さなどをお伝えしていければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（美術 小林）

① 《発芽A》一九四〇年、七八・七五×六一・六cm

② 《犬のいる風景》一九五三年、六五・二×八〇・三cm



# 江戸川乱歩「活辯志願記」を読む

今年で生誕百二十周年を迎える豊島区ゆかりの作家、江戸川乱歩（一八九四—一九六五）。日本における探偵小説界の巨星としてその名が知られ、旧宅は現在も立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターとして保存・公開されています。西池袋に安住の地を見出した乱歩ですが、若かりし頃は住まいと職を転々とする波乱万丈の人生を送っていました。今回は、『人世』に掲載された「活辯志願記」からその一端に迫っていきます。

そもそも、『人世』とは、池袋東口にあった映画館「人世坐」で発行されていた文芸誌のことです。一九四八年に作家の三角寛（一九〇三—一九七二）によって創設された人世坐は、「文士経営」の



① 旧江戸川乱歩邸土蔵外観

映画館として多くの文人たちが経営陣にその名を連ねていました。人世坐から徒歩五分ほどの場所に住んでいた探偵小説家の大下宇陀児（一八九六—一九六六）もその一人です。その他にも作家の井伏鱒二（一八九八—一九九三）や「フクちゃん」で有名な漫画家の横山隆一（一九〇九—二〇〇一）、活弁士など多才な活躍を見せた徳川夢聲（一八九四—一九七二）などが『人世』誌上で筆をふるいました。

『人世』十九号（一九五〇年十二月発行）には、「新年号より、医学博士で画伯の宮田重雄、探偵小説家の江戸川乱歩の両氏が、同志会委員のメモバー（筆者注…メンバー）に、新たに加はり、筆をおとり下さる事に決りました」と記されています。そして、早速『人世』二十号（一九五一年一月発行）に掲載されたのが件の「活辯志願記」でした。

「私の二十四歳の時だつたと思う。」という書き出しから始まるこのエッセイでは、乱歩が「本所区の大工さんの家の二階に間借りをし」ながらその日暮らしをしていた頃の回想録が記されています。

なお、乱歩自身によって編まれた『貼雑年譜』には、一九一七年の六月頃に一ヶ月ほど住んでいたと記録されています。まだたつぷりと時間のあつた乱歩は、

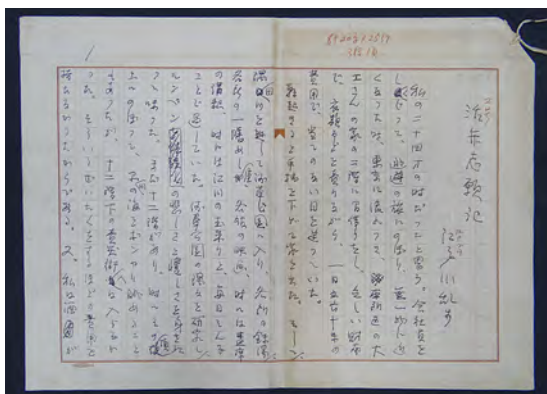
「浅草公園の隅々を研究し」、十二階（凌雲閣）の頂上へのぼって「品川の海をボヤリ眺めることもあつた」ようですが、生活はまさに困窮を極めていました。乱歩と浅草と言えば、その代表作である『押絵と旅する男』（『新青年』十巻七号、一九二九年）が思い出されますが、こうした経験が後の創作に影響を与えた可能性は否定できません。

そんな中、乱歩は「活辯になつて収入の道を得ようと決心」します。当時は、映画と言つても無声映画だったため、映像に合わせて語りを演じる活動弁士（活弁士）が一つの職業として成立していました。こうした決断に至つたのも、大衆娯楽としての映画館を擁する浅草という土地柄に触発されてのことでしょう。乱歩は、活弁士になるために浅草区内のとある弁士のもとを訪れます。ところが、「辯士の前座になつたつて、二三年は無給の手辯当だよ」と言われ、「すござごと引下つた」そうです。その後、乱歩は一九二三年に「二銭銅貨」でデビューを果たし、探偵小説家として一時代を築く

わけですが、この時に活弁士になつていたらまた別の人生を歩んでいたのかもしれない。

映画館における活弁は、トーカー（発声映画）が主流になつた後も一種の芸能として継続していきます。人世坐でもしばしば活弁大会が開かれていたため、『人世』に寄稿するにあつて、改めて「活辯」を目標していた時期のことを振り返つて執筆されたと考えられます。乱歩が『人世』に寄稿したのはこの一回だけですが、浅草時代を語つた興味深いテキストの一つです。現在、この草稿は豊島区が所蔵しています。

（文学・マンガ 市川）



② 草稿「活辯志願記」豊島区蔵

## 2014年度豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ事業予定 (2014年4年～2015年3月)

展示	夏 <span style="color: red;">の</span> 収蔵資料展「戦争を考える夏2014」 内容：1945(昭和20)年4月13日空襲を中心とした戦災資料のほか、新たに寄贈された町会、防空演習、建物疎開、出征兵士に関する資料・写真を紹介	5月15日(木)～ 8月31日(日)
	秋 <span style="color: red;">の</span> 収蔵資料展	9月 5日(金)～12月 7日(日)
	企画展「生誕80周年記念 横山光輝～昭和から平成へマンガの鉄人が駆け抜けた軌跡～」展 内容：1960(昭和35)年に千早に居を構えて以来、45年間にわたって豊島区に居住したマンガ家、横山光輝の生誕80周年を記念した企画展を開催 会場：東京芸術劇場5階ギャラリー2	10月 1日(水)～10月18日(土) (ただし、6日は休館)
	冬 <span style="color: red;">の</span> 収蔵資料展	12月12日(金)～ 3月31日(火)
講座・講演・見学会など	郷土資料館展示みどころ解説 内容：郷土資料館の学芸スタッフが月がわりで登場し、わかりやすく展示を解説	4月26日・5月24日・6月28日・7月26日 8月23日・9月27日・10月25日 いずれも毎月第4土曜日の14時から40分程度で解説、11月以降も同様に実施予定
	第9回新池袋モンバルナス 西口まちかど回遊美術館関連事業 講義と音楽試聴 「池袋のまちを音楽から楽しむ方法」 講師：武石みどり氏(東京音楽大学教授) 会場：豊島区立勤労福祉会館4階研修室2	5月17日(土)
	第9回新池袋モンバルナス 西口まちかど回遊美術館関連事業 講演会 「風景のなかの彫刻～裸体像 in 豊島区」 講師：木下直之氏(東京大学大学院教授/文化資源学) 会場：豊島区民センター4階第3・4会議室	5月18日(日)
	第9回新池袋モンバルナス 西口まちかど回遊美術館関連事業 講義と見学ツアー 「池袋のまちを建築から楽しむ方法」 講師：磯達雄氏(フリックススタジオ共同主宰、武蔵野美術大学非常勤講師) 会場：豊島区立勤労福祉会館4階研修室2	5月24日(土)
	企画展「生誕80周年記念 横山光輝～昭和から平成へマンガの鉄人が駆け抜けた軌跡～」展関連事業 トークショー (仮)横山光輝作品にみるマンガ観 講師：みなもと太郎氏(マンガ家) 会場：豊島区立勤労福祉会館6階大会議室	10月 5日(日)
	3分野連携事業	開催時期検討中
刊行物	豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより「かたりべ」112号～115号	年4回発行、2000部、無料頒布 6月・9月・12月・3月刊行予定
	研究紀要「生活と文化」第24号 付・2013年度年報	3月刊行予定
	企画展「生誕80周年記念 横山光輝～昭和から平成へマンガの鉄人が駆け抜けた軌跡～」展図録	10月刊行予定
臨時休館	展示替えに伴う休館①	5月13日(火)～ 5月14日(水)
	展示替えに伴う休館②	9月 2日(火)～ 9月 4日(木)
	展示替えに伴う休館③	12月 9日(火)～12月11日(木)
	年末年始の休館	12月28日(日)～ 1月 4日(日)

※都合により事業内容や日程を変更する場合があります。

※事業の詳細は、「広報としま」または当館のホームページで随時お知らせいたします。

※当館の収蔵展示室は、平成25年4月より新館移転準備作業室として使用しております。そのため、現在の展示スペースは、エレベーターホール部分と常設展示室部分のみとなっておりますので、ご了承願います。

### 編集後記

かたりべ112号をお届けします。本号より、副題が「豊島区立郷土資料館だより」から「豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより」に改題となりました。

豊島区では、(仮称)芸術文化資料館や図書館、区民事務所などの機能を備えた(仮称)西部地域複合施設の開設準備を進めてまいりましたが、建築費高騰の影響を受け入札が不調となり、二〇二〇年の東京オリピック前後を目途に事業推進の環境が整うまでの間、計画を凍結することとなりました。しかし、新館準備は止まることなく鋭意、進行中です。郷土資料館とともに、ミュージアム開設準備グループの美術分野、文学・マンガ分野、三分野の学芸スタッフが協力して、区民とともに新しい文化価値を創造する施設を目指し、準備に取り組んでいます。

本紙上においても三分野連携の紹介や最新の新館準備情報など、日々の調査・研究の一端をお伝えしていきます。  
(郷土 甲田)

### かたりべ No.112

2014年6月27日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>